

『今とりかへばや』の美的語彙から見る作者の認知  
—王朝物語における使い分けを踏まえて—

陳嘉謙

近年、性役割に関する議論が盛んになっている。その中で、『今とりかへばや』という作品は、このような問題に触れた先駆的な作品として評価され、探究する価値がある。しかし、先行研究は従来、女君の成長に焦点を当てたものが多く、女装の男君は往々にして看過されがちである。近年こそ男君に関する論考がいくつか見られるが、なお検討する余地がある。

男君が女装することは一見奇妙だが、それ以前の王朝物語において、男性を女性として見たい描写がすでに存在していたため、『今とりかへばや』におけるこのような描写は、文学的伝統を踏まえたものと言える。その上、「美」に関する語彙の使い分けにおいても、王朝物語の影響が見られる。

具体的には、美的語彙の使用頻度や文脈を分析したところ、「らうたげ」「うつくし」「なまめかし」において、主人公たちの性別による違いが認められる。このような使い分けから、男君の特殊たる所以、および苦悩の根源が浮き彫りとなる。その証左として、男装した女君の言動に関する描写に見られる、「なまめかし」と対照的な語彙の存在も看過できない。

以上の考察を踏まえ、語彙と人物の位置づけに対する作者の認知を把握するとともに、『今とりかへばや』の真髄は男装や女装という見えるものではなく、隠された「もの」の描写にこそあることを確認したい。